

られた。そして、継体二十二年（五二八）筑紫君磐井は斬殺され戦いは終了した。『筑後国風土記』によると、筑紫君磐井は上膳^{かみつみけのあがた}県（上毛郡カ）に遁走したと記されており、『日本書紀』とくいちがいを見せている。いずれにしても「豊」豪族を勢力下におき、又は頼りにしていたことは事実であろう。

大和政権は国造や屯倉^{みやけ}等を配置し、地方の強化体制を整えていった。『隋書』中の「軍尼」及び「伊尼冀」は『日本書紀』に見える国造及び稲置等と考えられ、その中に屯倉と呼ばれる比較的小規模な、王家の直轄領の管理者等が置かれた。豊国に見える屯倉は五か所であり、全国二六か所からするとかなり多い数字を示している。

- ・ 膝崎屯倉（旧企救郡）^{みささき}
- ・ 大拔屯倉（旧企救郡）^{おおぬく}
- ・ 肝等屯倉（旧京都郡）^{かと}
- ・ 我鹿屯倉（旧田川郡）^{あか}
- ・ 桑原屯倉（旧築城郡）^{くわばら}

九州ではこのほか筑紫国が二か所、火国が一か所見える。全国規模で屯倉を増やしていく傾向が見られ、推古天皇十五年（六〇七）には国ごとに屯倉が置かれたことが伺える。

三 古代山城の意義

朝鮮式山城 明治三十一年（一八九八）久留米の小林庄次郎をめぐって という人が、坪井正五郎のすすめで「筑後国高良山中の神籠石^{こうごいし}なるものに就いて」と題し、人類学雑誌に発表したのがきっかけとなり、神籠石論争に発展した。論争の内容は「靈域説」か「山城説」かである。

- ・ 山城説：朝鮮の山城と比較し、形状・構造等から古代山城であるとの説（関野 貞、八木契三郎、谷井済一ら）
- ・ 靈域説：日本では神奈備^{かんなび}という神霊を鎮め祀る神聖な地域で、列石がそれである。

…列石は一列で防御に役に立たないこと。

…神籠石内に靈域を優位にさせる神社が存在すること。（坪井正五郎、喜田貞吉ら）

この論争は明治以降、たびたび引き出され学会の焦点となった。終戦後、帯隈山神籠石・おつば山神籠石の発掘調査で、列石前面に柱を立てた柱穴が列を作っていることや列石の後に版築土塁を築いていることなどが明らかに、「山城説」という解釈が一般的になったのである。その後、鬼の城（岡山県）や大廻り小廻り（岡山県）などが調査され山城説はますます不動のものとなった。しかし神籠石山城は築城時期や歴史的背景など、まだまだ多くの問題を抱えており、最近では筑紫野市

（宮地岳山城）及び大平村において神籠石山城が新たに発見されるなど話題を呼んでいる。

一方、いわゆる朝鮮式山城として定説化している遺跡に大野城・基肆城等がある。これらの城の築城経緯については『日本書紀』に次のように記されている。

・天智三年（六六四）対馬嶋、杵岐嶋、筑紫国等に防人と烽を置き、水城を築く。

・天智四年（六六五）遣達率答・春初築城於長門国、遣達率憶礼福留、達率四比福父於筑紫国築大野及椽二城。

更に、『日本書紀』には天智六年に高安城、屋嶋城、金田城が、天智九年には高安城、長門城そして筑紫に二城を築くと記載されている。水城を含む大野城・基肆城は日本国防策の強化のために築城されたことが明らかである。唐・新羅の連合軍は日本に攻めてくる余裕がなかったのか、新羅は高句麗征伐を余儀なくされ、唐は新羅の策動により、朝鮮半島の掌握が意のままにならなくなったためと思われる。西日本一帯の山城の築城は「都城」的性格を備えていると言っても過言ではない。大野城・基肆城および鞠智城を中心とする山城は明らかに「西都大宰府」の護りであり、瀬戸内海一帯から機内に至る中国・四国地域に築城された長門城・屋嶋城・城山城・高安城等は「都」を防備せんとしたためであらう。

神籠石山城と朝鮮式山城の相違は、前者が標高六六・一メートル（おつほ山）～四六一メートル（城山）程度の山城中腹に石列土塁を巡らし、谷部及び平地に近い所には水門・城門を設置し、しかも加工石材を使用していることが大きな特徴である。それに対し朝鮮式山城は、標高四〇〇～五〇〇メートル程度の山頂部には鉢巻



写真3—1 大野城跡・百間石垣

状に土塁、平野から侵入しやすい谷部には長さ数百メートルにおよぶ石塁を巡らし城門を設置している。更に、城内には数十棟の掘立柱、建物・礎石建物等が設備されていることである。また、前者は文献記録に乏しく、築城年代も後者のように『日本書紀』等の記載がない。しかしながら、最近の文化財調査の進展により、これらの山城の相違点、及び共通点など関連機能を精査し、両者並行して存在したのではないかとする考えも出てきている。築城の背景は各研究者により異なっており、内政的には地方豪族による争乱は避けられない理由の一つであること。また、外政的には大陸への防備を目的にしたものとの考えが大方のようである。

以上のように、朝鮮式山城の遺跡が注目されるようになったのは、大正時代に遡るが、各山城の実地踏査が明治四十三年（大正年代（一九一〇～二〇頃）にかけて行われるようになり、それらの成果は各研究者によって続々発表されるようになった。以後、各大学や県・市町村等が中心となり、多角的視野からの調査・研究が継続されている。

古代山城の分布

西日本一帯に広がる神籠石山城と朝鮮式山城の分布状況を見てみよう。

神籠石山城は主として北部九州と瀬戸内海沿岸に分布しており、特に北部九州は玄界灘、有明海、周防灘を意識して、防備体制を構築しているように伺える。瀬戸内海沿岸は中国地方に

三城、四国に二城を配置し、明らかに中央である大和への防備を意識して配置している。

一方、朝鮮式山城は、筑紫大宰府の防備体制を中心に築城し、更に大和を意識したのか、瀬戸内海沿岸の三城をも構築している。神籠石山城では見られなかった畿内地方に高安城を築き、中央政権への侵害を意識し、航路による強化体制作りを図ったものと思われる。

神籠石山城

遺跡名	所在地	外郭 （㎡）	面積 （㎡）	水門	城門
おつぼ山	佐賀県武雄市	一・八七	一六・五	四	二
帯隅山	佐賀県佐賀市	二・五	二三・五	四	一
雷山	福岡県前原市	二・六	二八・七	二	
宮地岳	福岡県筑紫野市			三	
把木	福岡県把木町	二・四	二四・九	二	
鹿毛馬	福岡県穎田町	一・九八	一六・二	二	
高良山	福岡県久留米市	二・七	三六・一	三	
女山	福岡県瀬高町	三・九	四一・九	四	一
御所ヶ谷	福岡県行橋市	二・九二	三四・〇	二	七
唐原	福岡県大平村	一・七	二三・〇	三	
石城山	山口県大和町	二・五	二三・八	四	二
鬼ノ城	岡山県総社市	三・二	三八・六	五	五
大廻小廻	岡山県岡山市	三・二	三八・六	三	
永納山	愛媛県東予市	二・七	二四・〇		
城山	香川県坂出市	三・四	七四・八		

朝鮮式山城

遺跡名	所在地	外郭	面積	水門	城門
金田城	長崎県美津島町	二・八	二六・四	三	三
大野城	福岡県太宰府市	六・二	一八一・四	一	四
怡土城	福岡県前原市	六・五		四	三
基肄城	佐賀県基山町	四・四	六二・九	二	三
鞠智城	熊本県菊鹿町	一一・一	一二〇	一	三
長門城	山口県下関市				
常城	広島県新市町	七・〇		一	三
屋嶋城	香川県高松市	七・二		一	
高安城	奈良県平群町				
三野城	福岡県	？			
稲積城	福岡県	？			

豊前の古代山城

御所ヶ谷神籠石山城

勝山町の一市二町にまたがっている。京都平野の南西中央に突出した馬ヶ岳連山ホトギガ辻（標高二四六・九）に位置し、犀川町側は地形が険しく、行橋側の緩急地形がそれぞれ支脈と谷を形成し、谷部には水門等が発見されている。また、景行天皇の熊襲征伐にあたって、この地に行幸され、行宮がおかれた伝説が残っている。遺跡は明治以前より知られており、伊藤常足や西田直養らによって研究されているが、学会に初めて紹介したのは伊東尾四郎である。

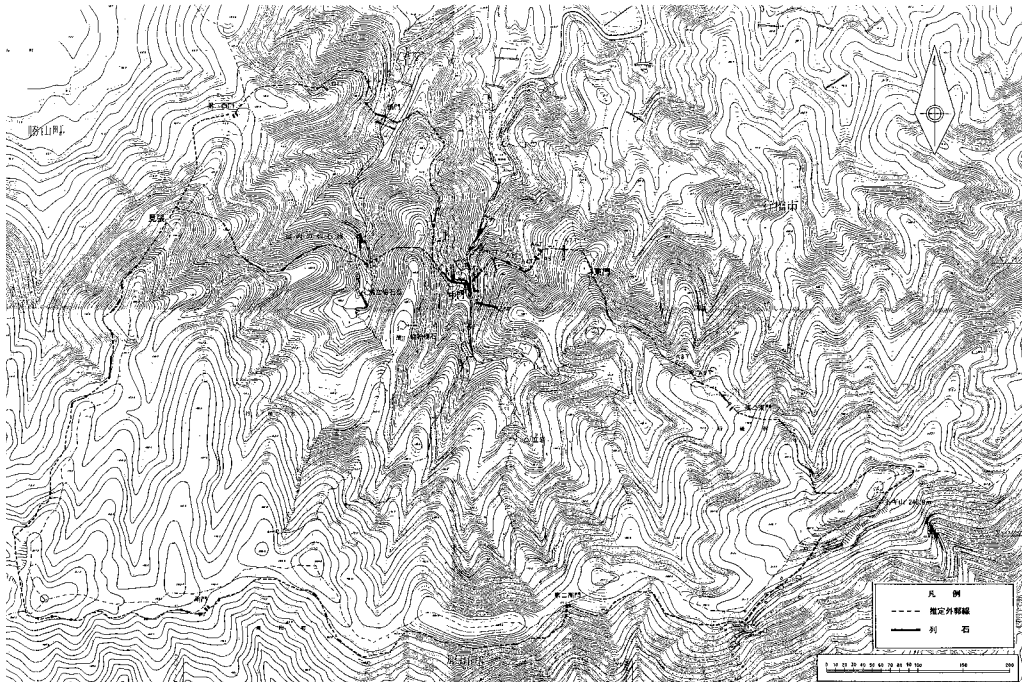


図3—1 御所ヶ谷神籠石山城地形図

神籠石は約二・九^{メートル}と推定され、最も低い位置に西門があり、二つの大きな谷を取り込んだ典型的な包谷式山城^{ほうこくしき}と言える。

列石

切石列石線を基礎とした土塁線が見られ、石は大小様々であるが大きいもので長さ二・四^{メートル}、高さ一^{メートル}前後が確認されている。列石の特徴は他の神籠石に比べ、曲線的でなく直線を一単位とし、それが屈折しながら列を形成するといういわゆる「折構造」と言われている。

門

門跡は全部で七か所確認されている。北側の大きな谷部にある中門と西門は、他の門に比べ比較的大形である。中門の門礎等は不明であるが、門幅は残存する側壁からおおよそ六^{メートル}に復原され、石塁は布石積で城門部を挟んで、西側は長さ約一八^{メートル}、高さ一〇^{メートル}の二段築成である。一段目の石塁には石樋^{せきひ}を突出させた通水口を設けている。また、西門は幅約四〇^{メートル}の谷部を石塁が覆っており、中門と異なつて石は重箱積みの工法である。

見張り巨石

西側の外郭線部に二か所存在する。北側の巨石は国指定を受けており、十数^{メートル}の一石である。南巨石も同様の大きさであるが、列石と接続していた可能性があり、今後の調査に期待したい。

馬立場

神籠石列に見られるような切石ではなく、自然石の石塁遺構である。西門の谷を南へ約二〇〇

^{メートル}の所に位置しており、人頭大から五〇^{センチメートル}ほどの石を乱石積にしている。礎石建物と同様中世山城に關与する遺構と見られている。

礎石建物

中門と西門の谷に挟まれた尾根部平坦地に存在する。規模は三間×四間の総柱建物で、礎石中に神籠石の列石に類似した調整面が観察できることから、神籠石を転用した可能性があると見て中世山城遺構と見るむきもある。礎石建物は古来から注目されており、元禄七年（一六九四）貝原益軒の『豊国紀行』に景行天皇の行宮としてこの建物が記されている。

唐原神籠石山城

遺跡は築上郡大平村大字土佐井・下唐原に所在する。東友枝川右岸の大平村と新吉富村の村境にあたり、標高七六〇八三^{メートル}の丘陵地に占地し、その山裾までの面積約二二万平方^{メートル}である。周防灘や山国川に向かって城は構築され、その眺望は広く、三つの谷を城内に取り込んだ、いわゆる包谷式山城と言われているものである。平成十年に発見され、平成十三年度から調査が開始され、現在も進行中である。

確認された遺構は列石、土塁、礎石建物及び水門跡である。以下報告にしたがって概要を記すこととする。

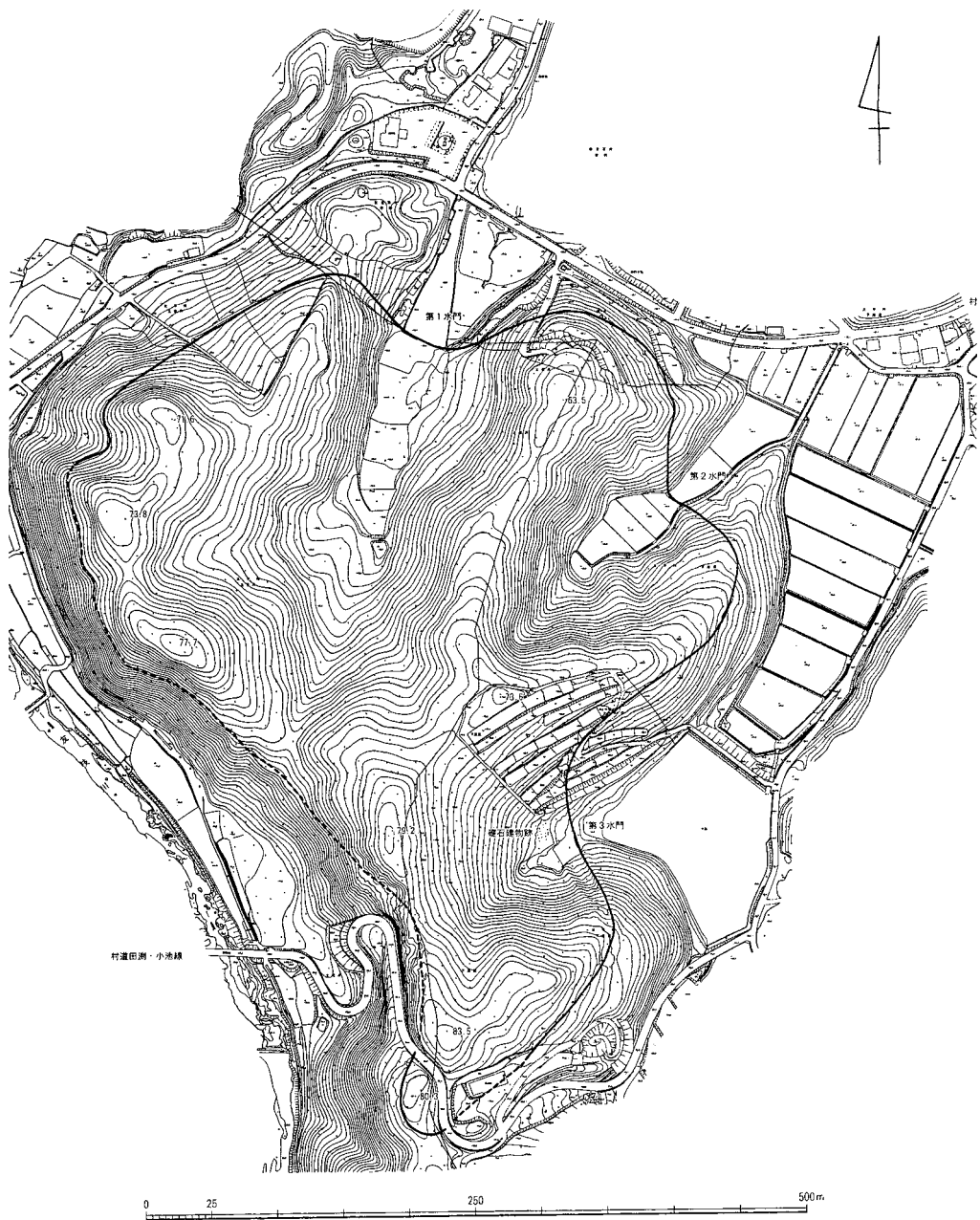


図3-2 唐原神籠石山城地形図

列石 列石外郭は全周約

一・七キロで、列石は尾根

稜線より若干低い標高六

〇メートルほどの所で三か所確

認されている。石は高さ

八〇センチ、幅一二〇〜一六

〇センチ、奥行六〇〜八〇センチ

程度のもので、材質は花

崗岩である。石前面には

神籠石特有のL字状の切

り込みが見られる。水門

の近くで最高二段積まれ

ているのを確認されてい

る。

土 壘

土壘状の盛土は、

東側に開く小さな谷の南

側で二条確認されている。

その一条は幅一〇

メートル、高さ一メートル、長さ約四

〇メートル、他の土壘は長さ約

五〇^{メートル}、高さ約二^{メートル}で、双方ともに土塁の間の土を削って盛土していること。版築法^{はんちく}は見られず、大まかに積土していること。第二土塁では基底部を階段状に削り出し構築していることなどが明らかになっている。

礎石建物

北側の平坦面で、梁行三間（約八^{メートル}）×桁行五間（約二^{メートル}）の総柱礎石建物を発見。柱間は各二・四^{メートル}で、梁行身舎のみ三・一五^{メートル}と幅広となっている。

礎石は花崗岩製で加工されておらず、建物周囲は一段高く基壇を形成し、南側及び東側に側石が検出され、一部には石が数段積まれていた。

水門（暗渠）

水門は三か所確認されている。発掘調査を行ったのは第三水門跡で、第一水門跡は現在調査進行中である。

水門には、城壁となる外郭線を構成する石列と更にその外側に一列の計二石列が確認される。つまり階段状に谷部を防ぐ構造となっている。水門中央部に暗渠が設けられており、全長九・六^{メートル}を検出し、最も残存状態が良かったのは一・六^{メートル}ほどである。暗渠は底石・側石・蓋石から構成され、花崗岩製で底石と蓋石では大きさが、約四〇～五〇^{センチメートル}ほど異なり、蓋石の方が大きいものを使用している。その大きさは四五～一五〇^{センチメートル}、厚さ一五～三〇^{センチメートル}程度のものである。暗渠主軸は列石に対し約八度北東側に振れ、取水口から排水口の底石勾配は約三度であ

ることが分かった。取水口の内法は縦二五^{センチメートル}、横幅四五^{センチメートル}で、外観は美しく仕上げられている。

調査結果から、暗渠内に七世紀第三四半期の須恵器甕片を発見したことから、暗渠の機能がその時期まで維持されていた可能性があるとされ、築造下限時期を前記時期に想定されている。